

S O N R I S A

# そんりさ

Vol.126



エクアドル・フェアトレード

「そんりさ」はスペイン語で「微笑み」を意味します。私たちレコムは様々な活動を通じてラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

- 2 エクアドル・フェアトレード：伊藤恭淑
- 7 最新ペルー情勢：松枝愛
- 11 ニカラグアのペンテコスタリズム：武田由紀子＝抄訳
- 15 グアテマラ・アガタ台風による被害状況：石川智子
- 19 アンデスの民話シリーズ・キツネが天の国へ行く：栗原茂太＝訳
- 21 音楽三昧♪ペルーな日々（第35回）：水口良樹
- 23 ミゲル先生のメキシコ食巡り：ミゲル・アクーニャ
- 24 ニュースクリップ
- 26 レコム総会議事録：嘉村早希子

# エクアドルにおけるフェア・トレードの動き

伊藤 恭淑<sup>やすよ</sup>

エクアドルの気候は、西は太平洋に面する海岸地帯、中央にはアンデス山脈が走り、東はアマゾンと変化に富んでいる。しかし全国的に、農村部に住む人々は、家族単位で、手作業により作物を栽培してきた。作物の出来は気象の変化に左右されやすいが、ほかに現金収入を得る手段はない。また、辺境な地域の住民ほど、人種や民族を理由に、時々中央政府から差別的な扱いを受けてきた歴史を持つ。教育水準は他地域に遅れを取り、国内外の政治経済状況を伝えるメディアからも遠い。こうした農村部の人々は、仲介業者に作物を安く買い叩かれたり、安い輸入作物に市場をうばわれてきた。一方、都市部でも貧富の差は大きい。慢性的に失業率が高いうえ、農村部から出稼ぎに來たまま、場



合によってはインフォーマル・セクターや路上生活者として定住する者もいる。夫から追い出された先住民族の女性と、その子どもたち、または周辺諸国から難民として逃れてきた人々が路上にとどまる場合もある。富裕層がゲートつきの高級住宅街を形成する他方、一角ではスラムが佇む。

経済的に脆弱なこうした人々は、ラテンアメリカ諸国が一樣に経験してきた、長期にわたる景気低迷やインフレーションの際も、より大きな打撃を受けた。

経済的に苦しい立場にある人々や、自国政府と対立するマイノリティ・グループ、性別や人種、民族を理由に差別を受けている集団、労働者を蝕み、自然を破壊する環境の中で働いている人々―彼ら、彼女らの生活の向上を目指して、労働に見合った賃金を支払い、労働条件を保障しようとするフェア・トレードは、エクアドルでも一九八〇年代から始まり、今日まで展開してきた。エクアドルの各地で営まれているフェア・トレードから、私たちは何を学ぶことができるだろうか。

い経済情勢を背景に始まったいくつかの取り組みは、活動規模や製品の幅を広げながら進展してきた。

スペインやスイスをはじめとするNGOや公的機関など様々な団体がフェア・トレードのプロジェクトに手をつけたが、とりわけ興味深いのが、国内でも小規模生産者を支援しようとするNGOが興ったことである。

現地団体であるFEPP（エクアドル民衆発展基金）は、一九八一年、販路に行き詰まった小規模農家と手工業者の組合組織、CAMALI（キチュア語で「贈り物」の意）を立ち上げた。辺境地域や都市部のスラムに住む小規模生産者を支援することを目的とし、二〇〇一年時点でグルテン加工品、チーズなどの酪農製品、マジパン・バルサ材・タグア（象牙ヤシの実）を加工した民芸品、インゲン、グラニュー糖、穀類、革製品などを生産する一五〇の団体が参加している。

一般的に、フェア・トレード商品といえばコーヒーやチョコレート、衣類などのイメージが強いのではないだろうか。実際、先進国のフェア・トレード・ショップで売られているのは、いま上げたものが大半だろう。しかし、CAMALIに加盟する生産者たちが扱うものは少し違う。というのも、現地で流通させることを想定した商品だからである。CAMALIのもとで生産されるフェア・トレード商品と、日本でも見かけるフェア・トレード・ショップの商品との相異については、他の団体が扱う製品とも絡め、後ほど考

## 一、各地のフェア・トレード団体

七九年の民政移管、そして八〇年代の厳し

察したい。

CAMALI設立の四年後、八五年には、寡占市場による物価の上昇と日用品の欠乏に抵抗し、必需品を最低価格で手に入れる経済システムを求めて、首都キト市南部の教会コミュニティがMCCH(兄弟のように手も市場もつなぎあおう)を設立した。近



タグアの指輪

隣教区の青年団体と連携をはかり、米と砂糖を重量比二：一で交換することから始まったこの取り組みは、扱う作物を多角化するとともに、八九年から活動の幅を全国規模に広げてゆく。輸出力カオの生産、現地市場向け一般作物、高山作物、手工芸品に加え、商品生産者や少数民族組織が参加する「社会的責任ツアー」も開催している。各地の店で商品を販売する女性たちのための、「MCCHの女性連帯」という取り組みもある。

その活動の規模は、二〇一〇年の時点でエクアドル二四県中一三県にまたがり、二〇〇六年時点で二万五千世帯が参加している。

MCCHの目標は、ラテンアメリカ内にフェア・トレードのネットワークを築く事でもある。首都キト市に構える二つの店舗では、国際的なフェア・トレード認証機関、IFATの会員団体

を通じて仕入れたアジア、アフリカ、ラテンアメリカのフェア・トレード商品を扱っている。フェア・トレードのネットワークは、地域や国境を越え、外に向かつてゆくだけではない。MCCHに加入する生産者が現地市場向けに栽培した作物は、都市部の貧困地帯でも「フェア・トレードの値段」で販売されるという。

ふつう、「フェア・トレード価格」とは、生産者のコストと労働への正当な対価、場合によってはそこへ援助としての割増し金を加えた額を指す。つまり、買う側は、他の商品を買うときより多くの額を払う。しかし、MCCHが貧困地域の住民に「フェア・トレードの値」で売ると言う場合、それはまったく逆のことを意味していることが分かる。元来、日用品の欠乏に抵抗するために始まったこの団体の取り組みは、あくまでも国内外でフェア・トレード市場を拡大させることではなく、人々が困窮から抜け出す力になることだという姿勢が見てとれる。

このほか、フェアトレードの理念に基づき生産者団体らを支援するSacha Urku(キチュア語で「森と山」の意)は、取引における中間搾取の排除、手工業者間の互助、環境調和型経済の実現を掲げる。四地域で手工芸品制作者や女性運動団体、先住民組織などからなる十四の生産者団体と七つのNGOを結び、技術支援や商品の販売をおこなっている。

Sacha Urkuに加盟する生産者組合の二つ、Consortio Toisan(トイサン山脈業者組合)が

ある。Consortio Toisanが活動の拠点とするインバブラ県西部のインタグ地方では、九〇年代半ば、政府による鉱山開発計画に反対し、住民が主体となって地域を発展させてゆくことを掲げ、環境保護団体や女性団体、青年団体、生産者組合が発足した。その後、生産者組合や女性団体を中心に、森林農法で栽培したコーヒーや、手工芸品をフェア・トレード商品として国外市場に輸出するようになる。エコツアーも人気だ。鉱山開発問題に一端の収束がついた二〇〇三〜四年ごろ、環境保護や女性の地位向上に携わる組織、生産者組合など、四団体が、地産のものを地元で販売し、地域経済を発展させてゆく共通目標を確認しあうため、Consortio Toisanを設立したのである。

これまで、現地インタグ地方の七教区、一万五千人が住む七〇の共同体で活動する、九つの団体が加盟し、現地の店舗やウェブサイトでコーヒー、カブヤ麻の編み製品、ナッツ加工食品、自然素材のシャンプー、アクセサリーを販売したり、傘下の団体の技術支援をおこなっている。

さて、主に三つの現地フェア・トレード団体について考察を交えつつ見てきた。ここまで省いてきたが、もちろん、どの団体もスペイン、スイス、ドイツ、アメリカなど欧米諸国や、一部日本の市場にむけて商品を輸出している。ただ、自社の製品のわずか一%がフェア・トレードであることを大々的に宣伝し、ブランドイメージを高めようとしたり、先進国の消費者が

好みそうな奢侈品を途上国の農村に発注することで、現地の生産者が貧困から救われるという考えに傾倒したり、新自由主義体制に対抗しようとするフェア・トレードの、現実としての功罪が、先進国の目線で語られがちな一方で、生産者たちの周囲にまずあるのは、やはりその夜の食卓に出す食物であり、コミュニティ内の店屋、隣の隣の県で栽培している作物と、自分の県で栽培している作物を交換する市場だ。フェア・トレード商品を輸入し消費する先進国のかで錯綜する、フェアトレードへの思いや議論は、生産者の日常を取り巻く、有機的な世界とはあまりにもかけ離れたところで展開されてきたのではないだろうか。

## 二、現地生産者組合訪問

二〇〇九年十一月、私は Consorcio Toisan



に加盟する生産者組合 AACRI のコミュニティがある、インバブラ県コタカチ市インタグ地方を訪れた。父親のホセ、母親のガブリエラ、二十代



半ばの息子ハビエル、一八歳の娘アンパロからなる、クエバ家に泊めてもらうことになった。クエバ家の家屋は、コミュニティの中心広場から山道を二〇分ほど下った場所にある。小川と山の斜面に挟まれ、庭には低木が茂っていた。インタグ地方のコーヒーの木はパイナップルやバナナ、アボガドなど多様な植物が生い茂る、起伏にとんだ森林の中に植わっている。素人が一見すれば、自然林の中にコーヒーが生えているような印象を受けるが、実際には森林農法の畑である。環境と調和しつつ、家計収入の安定と食糧自給率の向上を図り、多種の植物を同じ区画のなかで栽培しているのだ。クエバ家の脇の山腹が農園になっており、背の高い木々の下に赤い実をつけたコーヒーが植わっていた。インタグでは、ふつうコーヒーの収穫は五月〜八月頃行なうそうだが、クエバ家

では私の滞在中もガブリエラやアンパロが赤い実を見つければ摘み取り、服のすそをポケットのようにして収穫する。その横ではハビエルがアボガドの木に登って実を地面に落とし、ホセが自家製の肥料が入った樽をかき混ぜる。インタグでは土壌の再生と循環を促す取り組みとして、有機肥料の使用が広められてきた。各農家で、畑においた樽に家畜の糞や木の葉、土、卵の殻、野菜くずなどを混ぜ、四〇日間樽の中で熟成させて作るという。二匹の飼い犬が走り回るなか、家族はそばに植わっているバナナやグアヤバを食べながら作物の手入れをする。木々の下には小さな豚小屋があり、ギニア豚が二頭飼われていた。

コーヒーの豆は乾燥させた後、中心広場の近くにある AACRI の事務所に運ばれ、計量と品質査定の後、代金が支払われる。豆はそこから広場の反対側にある加工場に届けられ、選別、焙煎、パッキングの過程を経て出荷を待つ。加工場の脇には研究室が設けられ、以前鉱山開発によって汚染された土壌や河川の再生度を調べたり、各農家の森林農法の経過を観察している。隣の県で大学を出たばかりだという女性が働いていた。

インタグ地方の女性たちは、農作業のほか、余剰の時間を使ってカプヤと呼ばれるサイザル麻の繊維を編み、手工芸品を作っている。

現地の電力供給率は九五%だが、クエバ家には電気が引かれていない。一八時ごろから暗くなり始め、夕食は口ウソクの光の中で食べる。

夕食の片づけがすむと、ガブリエラが部屋から缶と布袋をとり出してきた。缶は裁縫箱になっており、袋の中には数色のカブヤ繊維の糸玉が入っていた。ガブリエラとアンパロは机に向かって作りかけのバッグを取り出し、ところどころ編み方や色を変え、模様を入れながら以前の続きを編んでゆく。二人はかぎ針を使用していたが、棒針や木枠を使う編み方もあるそうだ。男性二人も加わり、ガブリエラとアンパロは果物の収穫、体の調子、まもなくのアンパロの結婚など、家族四人で世間話をしながらカブヤを編む。彼女たちが扱うのは帽子やバッグ、ベルト、網、カーペット、タペストリー、籠などだ。デザインは月に一度の会合で雑誌を参考に決め



るほか、注文にあわせて新しい製品の開発もするという。

滞在一日目、私よりも遅くまで起きて製作を続けていた母娘は、翌朝、昨晚編んだというポシエットを渡してくれた。

カブヤ編みの手工芸品を作成する女性グループは、インタグ内外に多数存在する。グループ間で情報を共有したり、デザインの刷新や原料開拓をおこないながらも、自然素材を使用して環境負荷をかけずに加工することにこだわっている。ちなみにガブリエラは、家の周辺で取れる九種類の植物をカブヤの染料に使っているそう

だ。  
今回訪れたコミュニティでは、住民たちはみな何らかの組合に入り、作物の栽培方法を学んだり、環境教育から道路の舗装まで、コミュニティ全体で様々なことに取り組んでいるようだった。

### 三、生産者を通して見るフェアトレード

世界のさまざまな途上国で行われているフェア・トレード活動が紹介されるとき、多くの場



合は先進国の団体が支援を始め、取り組みが発展してゆく経緯が語られるため、現地生産者たちの試行錯誤がその時点から始まったかのような印象を持ってしまふ。しかし、実際はその以前から現地でも動きは起こっているのである。今回のエクアドル現地フェアトレード団体の例や、生産コミュニティ訪問は、そのことを再確認するものだった。

さて、CAMALIに加盟する生産組合は穀類やチーズなど、現地の生活に密着した商品をフェア・トレード商品として生産、販売していた。また、MOCHIは生産者に「フェアトレードの対価」を支払う一方、貧困層には「フェアトレードの値段」で販売していた。Scha Urku も然りである。

考えてみれば、コーヒーやファッション・アイテム、雑貨など、一般に先進国のプロジェクトを通してフェア・トレード・ショップの店頭と並ぶ商品は、経済的に余裕がある消費者の嗜好品だ。この傾向は、フェア・トレードの初期である一九四〇年代から変わらない。その一方で、例に挙げた団体が現地の日用品を商品として選択したのは、生産者たちの食べるもの、生活を今すぐどうにかしなければ、という危機的な状況を、ともに経験してきたからなのではないか。すなわち、現地の文脈で、貧窮とは何が欠乏している状態なのか、何があれば脱却できるのかを実感していたからではないか。現地では誰がより持っていて、だれがより持っていないかを理解していたことが、貧困層に「フェア・

トレード値段」で売ることにつながったのではないか。このことは、フェア・トレードが金銭を通じたチャリティではなく、必要な者に必要なぶんを分ける連帯活動だということを見せつける。

いまフェア・トレードは日本でもようやく広まりつつあるが、ここでもチャリティ、もしくはファッションとしての側面が強くなりすぎているように思われる。資源消費大国である日本人々は、日々気づかないままに様々なものを搾取して生きている。日本に安価な衣料を輸出するため、バングラデシュでは女性労働者が一日一二時間工場に閉じ込められ、台湾の日本向けの携帯電話工場では、新機能の開発と量産にやっきなあまり、労働者を自殺するほど過酷な労働に追い込んでいる。天然河川を買収して、水が飲めなくなった貧しいアフリカの人々に高額のペットボトルを売りつける大手飲料会社に投資してきた。エクアドル、ラテンアメリカも、地理的に遠くてもどこかで搾取する／される関係に埋め込まれているはずだ。その環のなかで暮らしながら、フェア・トレード商品の生産者にチャリティの視線を投げかけるのは、無責任なファンタジーである。

先進国の消費者が、倫理的に正しいと思えるものを購入することは必要だが、消費社会そのものの変革が求められているのであり、消費者を自己満足させるためのフェア・トレード商品であってはならない。生産者にとっても、フェア・トレードとは現金収入のみを受け取るため

の装置であってはならない。コミュニティを発展させる取り組みの一環として位置づけられるべきであり、参加することで地域の連帯や生産者らの衛生状態、教育水準が向上し、交渉力が強化されることに意義がある。その意味で、コミュニティの自主性を重視し、生産地や近隣地域に市場を見出し、また国内に幅広い連帯を生み出そうとしているエクアドルのフェア・トレードの事例は、途上国の小規模生産者に新たな道筋を示している。

さて、エクアドルの事例は、ある程度の作物栽培環境や設備が整っていれば、先進国との貿易を持ち込まずとも、自らの手で生活を向上してゆけるという暗示でもあるかもしれない。これまで、フェア・トレードに関する議論は「フェア」の部分を中心にするものが多かったが、今後は「トレード」に注目が集まるかもしれない。

著者の伊藤さんは、上智大学グローバル・コンサーン研究所勤務の傍らエクアドルの小規模生産者とのフェアトレードにむけ準備中です。

# 次期大統領選まで一年を切ったペルー 国民はどこへ向かおうとしているのか――

ペルー滞在中 松枝 愛

二〇〇六年七月の発足以来、四年が経過したアラン・ガルシア現政権の任期も残り一年となり、ペルーは今年一月三日に統一地方選挙、来年四月（期日未定）に大統領選を控え選挙戦が早くも熱を帯びている。第一期ガルシア政権（一九八五―九〇）時代とは打って変わり現在のガルシア政権は、新自由主義の経済政策を推進し、ラテンアメリカ（ラ米）諸国の中でも安定したマクロ経済の成長を示し、外国資本の導入も活発化している。統計情報庁（INEI）によると、経済の安定で貧困指数が政権発足時の四四％から三年間で三四％と一〇ポイント減少した。一方、今年に入りペルーはコカ葉生産量がコロンビアを抜いて世界第一位となったとされる。また八〇―九〇年代に暗躍し壊滅状態に追い込まれていたゲリラ組織「センデロ・ルミノソ（SL＝輝く道）」とトウパック・アマルー革命運動（MRTA）」が再び勢力を拡大しつつあるのが表面化してきた。地方では、新自由主義政策に抵抗する先住民組織と当局の衝突もくすぶり続けている。このような状況の下で、国民の「義務」とされている選挙で、ペルー国民

はどんな政権を選択しようとしているのか。筆者が約半年間のペルー滞在中に感じたり見聞きしたりしたことを織り込みながら、まとめてみたい。

## 好景気と左派の衰退

今年二月に首都リマで生活を始めて以来、タクシーに乗ると運転手に景気はどうかと必ず尋ねてみることにしているが、十中八九肯定的な答えが返ってくる。〇八年末からの世界金融危機下にあっても、「この国は確実に良くなっている」と言う。確かに、街には活気がある。リマ市内のあちこちで公共工事が行われていて、少し郊外に出ると、砂漠の灰褐色の大地に新設された公共施設や丘の上まで続く階段などが、黄色と青のペンキで仰々しく塗られているのが目を引く。これは次期大統領戦出馬を目論むリマ市長ルイス・カスターニエーダの人気取りを狙ったものとも指摘されるが、とにかくインフラ工事が盛んだ。金融分野も好調のようで、クレジットカードのサービスが普及し、あの手この手で利用者を刺激している。信用取引の増加

は、内需の堅調さを示すものだろう。

好調な経済を牽引しているのは外国資本だ。特にサービス分野ではチリ資本が強く、人々の生活に直結する日用品などを扱う大手スーパーや薬局は次々と店舗を増やしているが、こうした大型チェーン店のほとんどがチリ資本となっている。ペルー経済を支える鉱山業などの資源開発分野にも、外資が盛んに投入されている。

現政権の新自由主義経済路線は、九〇年代のフジモリ政権時代から踏襲されてきたものである。政情が安定したトレード政権（〇一―〇六）辺りから、経済成長が常態化しつつあった。今年五月末にリマで開かれた第三回ラ米・カリブ財相会議の開会式で、ガルシア大統領は、「第一期政権時と今期の経済運営の違いは、私が変わったのではなく、国際通貨基金（IMF）が変わったからだ」と言っている。ガルシア政権は、第一期に財政支出の大幅拡大、金融統制、対外債務の返済凍結などを行った結果、年率七〇〇％を超えるハイパーインフレによる経済後退と混乱を招き、IMFを激怒させた苦い経験がある。

トレード政権下では、マクロ経済の恩恵が国民生活に反映されていないことが国民の不満を募らせた。特に地方の失業率や貧困率は悪化し、貧富の差が拡大した。これを教訓に、ガルシア政権は、「外資増加が国民生活を豊かにする」とのスローガンを掲げ、水や電気の普及拡大に努めている。地方の電気や水道の開通式に出席する大統領の演説内容は、大抵そう変わりな

く、「ペルーでは日々発電量が増えている。他国の中には、発電のための外国投資がないために停電を余儀なくされる国がある」、「投資を拒否して、傲慢にも『我々は十分足りている。外国資本も外国製の機械も必要ない』などという国は、銀行取引や労働者の預金を脅かす結果を招いている」(二〇一〇年一月一七日)といった発言が聞かれる。

堅調な経済成長を反映してか、〇六年の大統領選挙の一次選で得票率一位を獲得しながら決選投票でガルシアに破れたペルー国民党(PNP)党首オジャンタ・ウマララの勢いは後退している。理由は、①PNPの旗印や政策を時代遅れと見る傾向が強まっている②ベネズエラのウーゴ・チャベス大統領との関係を危惧する声が依然強い③ウマララの支持が高かった地方で今やケイコ・フジモリの人気が高まりつつあること、などが挙げられるだろう。

### 先住民組織と政府の衝突。

#### 未だ発効されない先住民との事前協議法

ガルシア現政権下で、政権を揺るがせた最大の事件は、〇九年六月五日の「バグア事件(バグアソ)」だ。ペルー北部のアマソナス州バグア地方にある国営石油会社ペトロペルー社の油田一帯で同年四月下旬から、先住民の権利を脅かす諸法令の廃止と、対話に向けた政府の対応を求め、アワジュンとワンピの先住民族が平和的な抗議行動を展開し、緊張が高まっていた。政府は事態打開のため、ペルー国家警察特殊作

戦本部(DINOS:テロが横行していた九〇年代に治安維持部隊として機能していた)を抗議運動が起こっていた各地方に派遣したが、六月五日、バグア郊外で道路封鎖を行っていた先住民族と衝突した。特殊部隊に発砲された先住民族は投石で抵抗したが、警察から奪った武器を使って警官らを拘束したり射殺したりしたとされている。衝突の死者は三四人で、うち二五人



反政府デモの(二〇一〇年四月二三日松枝撮影)

は警官、九人は子どもを含む先住民だった。負傷者は二〇〇人を超えたと伝えられる。政府は責任を先住民側に転嫁し、ペルー熱帯雨林開発先住民協会(AIDSEP)の代表アルベルト・ピサンゴらに逮捕状を出し、ピサンゴはニカラグアへの亡命を余儀なくされた。

ペルーは一九九四年にE〇一六九条を批准したが、それにも拘らずガルシア政権は外資投入と資源開発を優先させ、先住民の権利を無視していた。「バグアソ」への政府の対応は、国際社会から痛烈に批判され、レコムも諸団体と共同でペルー政府に抗議声明を送っている。「バグアソ」を無抵抗な市民に向けた政府の「虐殺」と捉えるペルー人民は、全国各地で抗議行動を起こした。しかし政府の姿勢は変わらず、先住民の願いは聞き入れられないまま。また近年、先住民族の存在を脅かす諸法令の立法化の動きが進んだのは、〇八年に締結した秘米二国間の自由貿易協定(TICITA)の規定を適応しやすいうようにするための法整備だと受け止められている。

ニカラグアに亡命していたピサンゴは、「バグアソ」から二年を迎えようとしていた今年五月末ペルーに帰国した。身柄をいったん当局に拘束されたが観察処分となり、その後再びAIDSEP代表として活動している。

ペルー議会は今年五月、「先住民族の権利及びE〇一六九条の尊重に関わる法律」、通称「先住民との事前協議法(Ley de consulta)」を承認した。これは、第二条で、「事前協議の権利

とは、先住民族の物理的存在や文化的アイデンティティ、生活の質、発展といった集团的権利に直接関わる事柄について、事前に協議する権利を言う。同時に、これら権利に直接関わる国家のおよび地域的開発計画についても協議がなされることを言う」と謳うように、先住民族の生活に関わる行政計画に、先住民側との事前協議義務を課す法律である。その後、同法は大統領令による発布という段階に入っていたのだが、六月下旬、大統領の意見書付きで国会に差し戻されてしまった。ガルシア大統領は、「全てのペルー人の利益につながる経済発展を先住民族が止めることはできない」と発言する始末だ。政府と先住民団体の歩み寄りが期待されて成立した同法だが、発効しないまま、事態はまたもや暗礁に乗り上げた。

### コカ葉生産世界第一位

六月下旬、あるペルー紙は、「ペルーが（メキシコの都市）シウダ・フアレスのようになる日」という記事を一面に掲載した。国連薬物犯罪事務所（UNODC）が同月二三日に発表した「二〇〇九年コカ栽培監視報告」によると、ペルーの〇九年のコカ葉栽培量は一一万九〇〇〇トンで、コロンビアの一〇万三〇〇〇〇トンを上回り、世界最大のコカ葉生産国となったという。コロンビアと米国による麻薬撲滅作戦「コロンビア計画」が奏功し、コカ葉の作付面積と生産量が減少する一方、栽培が国境を越えてペルーに移っただけで、アンデス地域全体では実質的

な変化はない、との見方もある。

ペルーでは九六年までは生産高が世界一だったが、治安情勢の変化で栽培地の多くがコロンビアへ移動した。それが近年、ペルーへ戻りつつあることが明らかになったわけだ。ペルーのベラウンデ外相はこの統計の正確性に疑問を呈しているが、UNODCも米麻薬取締局（DEA）も、より徹底した麻薬取締政策の実行をペルー政府に求めている。また、同報告はDEAの情報として、国内で主要なコカ葉生産地域であるクスコ州、アヤクチョ州、フニン州に跨がるアプリマック川エネ両川渓谷（VRAE）地方の栽培地の八割を、メキシコの麻薬密売組織「シナロアカルテル」が支配していると記述している。

ただし、栽培面積の数値はコロンビアが六万八〇〇〇haでペルーの五万九九〇〇haを上回っている。また、コロンビアのコカ葉はオープンで乾燥させるため、日干しのペルーのコカ葉よりも水分が少ない分、重さが減る。コロンビアのコカ葉が日干しで乾燥処理されていたら、約一五万トンとトップだったはずだとUNODCのペルー代表は指摘した。ともあれ報告は、面積でも生産量でもペルーの増加は顕著であり、コロンビアを凌ぐ勢いであると警告している。

ペルーの非伝統的コカ葉栽培の増加地域は、VRAEのほかウアヌコ州のウアジャガ高地が挙げられるが、いずれも「センデロ・ルミノソ」が勢力を拡大している地域である。「C」も麻薬ビジネスの関わりは同報告書でも指摘されてい

る。

### フジモリ元大統領の影響力 長女ケイコへの高支持率

地元カレータ誌は四月下旬、服役中のアルベルト・フジモリ元大統領のもとに二百人近い接見人が日々訪れているとの特報を掲載し、未だ同氏の影響力が強いことを世間に知らしめた。そんな中、長女ケイコ・フジモリが五月、「フエルサ二〇一一」という政党を正式に立ち上げた。トレードマークはケイコの「K」だ。政策顧問及び事務局長には、フジモリ政権時代に国會議長や内相を務めた日系のハイメ・ヨシヤマを据えた。フジモリ元大統領の支持基盤を受け継ぐケイコの人気は高く、三五歳と若いが父の政権時に一〇代で第一夫人役を務め、〇六年から国會議員として活動するなど知名度は絶大だ。

ケイコが大統領になれば、父親を恩赦すると見られている。本人は明言を避けているが、父親は無実だと断固主張しているのも確かだ。ケイコに対しては、米国留学の資金源が不明だとの「疑惑パッシング」があるが、本人は汚職との関与を否定している。

リマ郊外や地方では、民家の塀や高速道路沿いに白地に黒とオレンジ色で「KEIKO2011」と描かれたプロパガンダが目を引く。ケイコは「父はテロ排斥と治安回復という大きな成果を挙げたが、一方で失敗もあった。私は失敗から学び、父とは違う政治を行う」と主張している。

## 選挙戦動向

今年六月二〇日にエル・コメルシオ紙が全国で行った世論調査では、大統領候補としてケイコ・フジモリがトップ（二二％）につけた。二位は僅差でルイス・カस्ताニエーダ現リマ市長（二二％）だが、リマを除いた地方でのケイコの人気は他候補に五ポイント以上の差をつけ突出している。三位はオジャンタ・ウマール国民党首（一三％）、四位にアレハンドロ・トレード元大統領（一二％）がつけた。未だ立候補の届出は始まっていないが、上記四名が現在有力候補と見られている。与党アプラからの立候補者は未定で、ハビエル・ベラスケス首相やメルセデス・アラオス経財相、ニディア・ビルチェス女性相の名前が上がっている。しかし、ガルシア大統領は第一期政権末期九〇年の選挙実施直前にフジモリ支援に回ったことがあり、本人らは否定するが、フジモリ派とアプラが協同する公算も否定できない。

## おわりに

ペルーの友人らは、政治の話になると、「投票したい候補者がいない」とよく口にする。投票が義務制で、怠ると罰金が課されるペルーでは、白紙投票であつても必ず投票に赴かなければならない。そのため多くの有権者は消去法で投票するので、「同じ悪ならましな悪に」という言い回しがあるほどだ。

第二期ガルシア政権のここ四年間は、好景気

の恩恵を受けて生活水準を上げた人々がいる一方で、資本主義経済と一線を画す社会的マイノリティは虐げられ、水面下でゲリラ組織や麻薬組織の力が復活していた。未だ人々の中ではテロ左翼ゲリラという認識が強く、テロ時代を知らない青年層の間に浸透していると言われる MRTA や SL のゲリラ思想に、ペルー社会は大きな不安を覚えている。ガルシア政権が中道左派と言われながらも実質は経済界寄りの立場を取るのには、消去法で生き残るための手段なのかもしれない。支持率が三〇％前後、不支持が五〇％台後半に留まる現政権がなし得なかったことを最も期待させる候補者が、次期大統領の座に就くのだろうが、あらゆる人の心をつかむ公約を打ち出すか、新たな候補が彗星のごとく現れない限り、現時点では次期大統領選も消去法で残る「無難な」候補者が勝ち残るように思う。

## ニカラグアのペンテコスタリズム

本稿は、社会研究者バオラ・ポロニェン氏によるニカラグアのペンテコステ派教会の調査報告「ペンテコステ派福音主義者―ある描写」(『エンビオ』三三八号、二〇一〇年五月に掲載)の抄訳である。現在中米ではペンテコステ派キリスト教が爆発的な勢いで普及しつつあり、特に都市の周辺の地区の貧困層や疎外された人々の間で大きな成功を収めている。ラテンアメリカにおけるペンテコステ派は少なく見積もっても全プロテスタント人口の三分の二を占める。ニカラグアでは人口の二六%がプロテスタント、その七三%がペンテコステ派である。彼女の報告は、この新しい宗教的社会現象を理解するための重要な手がかりを提供してくれている。

### 【四つの特徴】

ペンテコスタリズムは福音派プロテスタントイズムの特殊な表現であり、教派や教会間の多様性にも関わらず「原理主義」、「熱情的な信仰のあり方」、「強力なカリスマ的リーダーシップ」、「全人類への福音伝道使命」という共通の特徴が見られる。

### 【原理主義】

ペンテコステ派の人々は聖書の靈感と無謬性を信じている。彼らによると、神とサタンは人間たちの日常生活に介入しており、どちらも人間を「戦士」として用い、善と悪の永遠の闘いを繰り返している。健康、仕事、愛情といった個人の生活の快適な状況(健康、仕事、愛情等)は天の祝福であり、病気や経済面・人間関係における困難は罪の結果とされる。罪を犯すということは、サタンに仕えるように悪魔たちがその身を占拠するのを許すことであり、そうなるとその人は次第に不正なふるまいへと駆り立てられていき、彼のみならず彼を取り巻く人々をも破滅へと導くことになると考えられる。

聖書に従い、彼らは家族を中心的かつ必要不可欠な制度として重視する。家族は性別と年齢による役割分担とヒエラルキーによって統治されるべきで、男性の優位、両親の子どもに対する全面的権威、家長の権威が尊重されねばならない。さらに、規律あるピューリタンの生活スタイルを守るべしとされる。盗み、嘘、暴力などは禁止され、アルコールなど依存を誘発するものの摂取、ファッションの流行を追いかけることも禁止される。

### 【熱情的な信仰のあり方】

日常生活においてはピューリタンの厳格さと節制が強要されるが、儀式や祈祷の場では逆に恍惚状態に至るまでの情熱的な全面的関与が奨励される。牧師は通常信者と同じく低い社会階層の出身であり、それゆえ教会でのコミュニケーション形態はもっぱらオーラルなものである。口語的な語り口で実際にあった話や信仰告白、夢について語られる。彼は場の雰囲気を活気づけ、信者たちに一体感や熱情的な参加を促す。

彼らの信仰では、神が送り込んだ聖霊が信者の体に憑依して悪魔を祓い、彼らを解放・浄化する。病氣癒しの奇跡も見られる。聖霊を受け入れると彼らはトランス状態に入り、聖霊が去ると、リラックスした気持ちで、幸福感に満たされる。

こうした恍惚状態はアラバンサ(歌と踊りによる神の賛美)や集団祈祷の最中に到来する。礼拝堂には大音量のアンプが設置されており、ロックやルサなど現代音楽に基づくキリスト教音楽が演奏される。信者たちは陶酔し踊り乱れる。集団祈祷はそれぞれの信者が即興で、大声で、目を閉じ、腕を高く上げて行う自発的な祈りである。神との直接対話の間、礼拝堂は耳

をつんぎく騒音で溢れかえる。

### 【強力なカリスマ的リーダーシップ】

信者たちは牧師が神と特権的な関係を持ち、彼の介入によってのみ神が自分たちの要求に応じてくれるものと信じている。それゆえ牧師は信者たちから深く尊敬されており、彼らは牧師の指示に従い忠実に実行する。牧師はまさに独裁的なやり方でコミュニティの生活を組織するカウディエーションである。神学的な訓練は十分ではないが、表現力豊かで雄弁、演劇的な説教で信者たちの心をつかむ。

### 【福音伝道の使命】

「博愛主義的な思いやり」、「終末論的動機」、「『兵站的』かつ儀礼的評価」という三つの理由から構成されている。無宗教の人に信仰を勧めるのは、彼らが信仰によって自分の問題が解決されたと感じているためであり、他の人々にも同じ経験をしてもらいたいと思っただけだ。また、神学的動機によりキリストの地上への再来に備えてできるだけより多くの人々を改宗させる義務があると考えている。さらに、神とのより良いコミュニケーションを可能にするという目的にも促されている。彼らは聖霊

は多くの人々が一斉に祈りを捧げる場所に優先的に訪れると考えている。

### 【勧誘・改宗】

ペンテコステ派の教会は新しい信者を取り込むためのよく練られた戦略を持つ。

### 【コミュニティ・リーダー】

新規加入者を引き寄せるために、コミュニティ・リーダーが身綺麗な姿で通りを歩き回り家々の扉を叩き、病院や刑務所を訪ねる。最初に標的となるのは病人、アルコールック、麻薬中毒者、囚人、極めて不幸な家庭環境にある人等深刻な問題を抱える人々である。リーダーたちは地区内の民家で宗教的集会（細胞）を行う。人々を迎え入れ、彼らの抱える困難やニーズを聴き取る。あからさまに批判したりせず、助言を与え、彼らのために神への祈りを捧げる。彼らを歓迎し友情を示し、具体的な心理学的・物質的支援を提供する。

### 【エンクエントロ】

引き寄せられた人々を改宗させ、完全に教会に吸収するための効果的な装置が「エンクエントロ（神との出会い）」である。週末の四八時

間を費やす静修会であり、毎月男性女性別交替で組織される。郊外のホテルで宿と食事をとりながら「プレナリア」と呼ばれる一連の講演に朝八時から夜一時半まで参加し、最後に「解放の儀式」を迎える。エンクエントロの諸活動は教化を効率的に行い、参加者たちの内省プロセスと自尊心強化を促すためのものである。

プレナリアでは、信仰告白、ライフヒストリー、社会劇のかたちで罪人たちの不幸が物語られる。聖書ではつきりと禁止されている多くの振る舞いが伝えられ、その場にいる人々はこの罪の主人公たちと一体感をもつ。プレナリアで提示される物語（争い、虐待、放棄によって継続的な深い苦痛を与えられた数々の人生譚）は、参加者たちが忘れようとしてきた彼らの実存の暗い側面について熟考を迫る。

プレナリアにおいて、牧師は参加者たちに自分分は罪人でありまた犠牲者でもあると感じさせる。牧師は彼らが罪を背負っており、彼ら自身が自分や家族に降りかかる多くの呪いの原因であると認めさせる。同じメカニズムで、彼らが苦しまなければならなかったのは彼らを取り巻く人々、彼らの家族の罪のせいであったことを説き、彼らは犠牲者であったと感じさせる。人生を変え、罪や抑圧の息苦しい感覚を振

り払うためには、罪を後悔し、他者の罪を許し、神に聖霊を送ってくれるよう懇願すべきであると論ず。

\*

筆者が参加したエクエントロでは、このための特別なダイナミクスが組織されていた。このために集まったあらゆる年代の教会のメンバーを目前に、自分の家族に最も似ている人のところへ向かい、その人を抱きしめ、許しを乞い、或いは自分たちが彼らを許さなければならぬのだ。彼女たちの中には自暴自棄になり泣きだす者や氣を失うものもいた。

\*

牧師は、神は愛情深い良い父親のようにあなたがたを助け、キリストはあなたがたのためにその命を犠牲にした、とくり返し説き、彼らの自尊心を高めようとする。奉仕人たちは彼らを温かく迎え、彼らが教会の仲間たちから愛されていることを示す。こうした充足感をはじめに組織される年齢グループによっても引き起こされる。エンクエントロを通じてグループでさまざまな苦しい瞬間や感動的な瞬間を共有し、数日の間に私たちメンバー間の関係は強まった。そうした友情関係はその後の教会への集団加入に有利に働く。

### 【教会の意義】

ペンテコステ派の説教とメッセージが人々に影響を与えるのは、幅広い社会階層の人々が感じている不満やニーズを満たすからである。ペンテコスタリズムは急速な近代化、そこから疎外された層の方向感覚を失った当惑、農村―都市間の移住によって加速された都市化の文脈で普及してきた。なぜならそれは連帯、相互扶助、共同体的凝集を修復し、社会的なセーフティネットを提供するからである。治安が悪く、各世帯が孤立して暮らす町の周辺の地区では、ペンテコステ派の教会が社会化および安定した社会関係創出の唯一の機会なのである。

改宗は貧困者たちに威厳を与え、それは彼らにとつて一種の倫理的救済を意味する。それは聖霊によって祝福され解放された共同体に入ることであり、日常生活において彼らを抑圧しているすべての判断基準を消去・攪乱する。替わって「神の恩恵はすべての人々にアクセス可能である」という唯一の原則が置かれる。

さらに、彼らは教会のメンバーとして教会の活動の組織化や実行など数多くのボランティア、あるいは自分自身が主人公となる機会に参加し、そこから大きな満足感を得ている。特に女性は家庭内で経験することのない役割を教

会で果たすことになる。

ペンテコステ派の教会は、依存症など問題を抱えた人々や家庭や街角で暴力を引き起こす輩の回復に取り組むことで社会に重要な奉仕を行っているのかもしれない。周辺の地区に張り巡らされた血管網のあり方ゆえに、政府やいかなる世俗的組織も達しえない人々のところまで到達しており、今や中米における社会的救済の主要なアクターとなっている。

### 【社会運動？市民社会？】

#### 「新しい社会運動？」

いく人かの著作者たちは、ペンテコステ派の教会が社会にポジティブなインパクトをもつことを確言している。好ましくない社会状況にある人々が教会に集められ、そうした層に政治的代表性を提供しうるアソシエーション的なリアリティーが生み出されるからである。こうした観点から見ると、これらの教会の存在および普及は政治的協議の民主的判断に不可欠な第三セクターの多様性・複雑性をもたらすと思われる。カンボスは、こうした教会は貧困者たちに「力」と「社会の中における役割」を与えるコミュニケーションを創造するとし、市民社会へのポジティブな貢献を認める。アルバレスはさら

に、この宗教的潮流は民主主義の助変数を規定する新しい社会運動の一つと見なしうると言う。

しかしながら、教会の行動の目的はあくまで自分たちの宗教的共同体の発展とメンバーの社会的成功である。彼らの意識が地区の他の住民たちの問題やより広範なレベルにおける貧困問題の解決へと向けられることはない。D・マーティンが言うように、カトリック教徒と違って、ペンテコステ派の人々は「個人主義的」パターンに沿って行動している。それは自立的な個人の味方をするものではなく、グループの味方をするものであり、結果としてセクトの特徴をとっていくことになる。

### 〔市民社会の一表現として〕

ペンテコステ派の教会は、「排他的な」アン・シエーションであるのに加え、政治協議の決定に積極的に関与をしない市民社会の一表現でもある。公的な利害問題への無関心は宗教的な配慮によるものでもある。彼らにとって不正、不平等、力の悪用は個人的な罪あるいは神の呪いの結果である。そうなると、こうした社会問題を解決するのに組織化する意味はなくなる。

唯一できることは神の直接介入により問題

が解決されるよう神に祈ることである。しかしだからと言って、これほどの数に到達したペンテコステ派が選挙において重要性を持たず、何らかの公的政策（中絶問題など）において考慮されないわけではない。ここで強調したいのはこれらの教会が政治的空間に野心がなく、信者の政治参加の意欲を削ぐということである。現実についての宿命論的解釈を促進し、消極的で批判精神のない市民を生み出す。ペンテコステ派の教会は大きな民衆動員を生み出す組織ではあるが、社会の変化や議論には貢献しない。

### 〔金の問題〕

教会が貧困者たちをより効果的な経済管理へと導いていることに異論はない。男性たちにはアルコールや煙草を断念させ、稼ぎの大半を自分のためだけに使うマチズモ的価値観が疑問が付されれば、結果として女性や子どもたちによる利用が顕著に増加するだろう。

しかし、結局のところ、誰がその財の管理の恩恵に浴しているのか。ここでは「一〇分の一税を支払う（収入の一〇%を牧師に渡す）」義務が考慮されなければならない。これは信者にとってでは欠かすことのできない義務である。なぜなら、この行為によってのみ経済的天恵を期

待しうるからである。

また礼拝時以外にも信者たちはさまざまな状況において献金を行う。例えばエンクエントロであるが、これに参加するには三〇ドル（国民の四八%にとっての一ヶ月の収入に相当）支払わなければならない。付き添いの奉仕人たちも二五ドルを支払い、その上一日平均一八時間働く。さらに、「牧師家族のパーティー」の折に、信者たちは牧師に贈り物をする。筆者が調査した教会のD牧師は二〇〇八年にはジープを、〇九年はコスタリカへの三週間の家族旅行を受け取った。

牧師たちは信者たちからの献金で得ている金を教会の公益事業に投入せずに自分たちのために排他的に保管している。献金の使命は聖書に記される神意への応答であり信者たちにとって議論の余地はない。牧師が裕福になるのは、そうした至高の神意の結果であり、神による大きな祝福を説明するものだからだ。ただ明らかであるのは、この宗教の普及はこれらの教団の精神的リーダーたちに経済的に大変有利に働いているということである。

（出典） revista Envio

（<http://envio.org.ni/articulo/4179>）

（抄訳＝武田由紀子）

## グアテマラ・アガタ台風による被害状況

グアテマラでは五月十五日頃にその年初めての雨が降ると言われ、トウモロコシ植え付け時期の一つの目安となつてゐる。それから約半年の雨季となり、その後半には台風も多い。一九九八年十一月のミッチ台風や二〇〇五年十月のスタン台風のように、数年おきには大きな被害をもたらす台風にも見舞われている。

そして今年も雨季に入つて間もない五月末、アガタ台風により西部から南部、東部にかけて広い地域が甚大な被害を受け、一六五人の死者、十万人以上の被災者を出した。これまでにレコムが協力関係を築いてきたいくつかの組織から聞いた被害状況と被災者への支援活動、現地を視察した様子を報告する。

### 【希望をはぐくむ女性たち協会】

周囲を山に囲まれたキチエ県サカプラスでは、灌漑を利用して年に二度トウモロコシを収穫できるネグロ川兩岸の平地は重要な耕作地で、換金作物の様々な野菜も作られていた。しかしアガタ台風により川が大規模に氾濫し、ほぼ全域で兩岸の作物のみならず畑の表土が流されて、後には砂が蓄積し、場所によっては大小のたくさんの石が残されている。また橋が崩壊し、住居が失われ、川に流されて亡くなった方もある。

この地域の十コミュニティに参加グループを持つ「希望」協会は、災害直後から各グル

プと連絡を取つて被害状況の把握に努めた。五コミュニティで四十人が畑を失い、二人が住居を失つていた。

六月十四日、「希望」協会の運営委員たちの同行を得て、被災したメンバーの女性たちを訪問した。この日同行してくれた運営委員のカタリーナさんは、自分の畑を持たないので、このネグロ川岸に約三六〇〇㎡の畑を年間二五ドルで借り、トウモロコシや野菜を耕作して六人の子どもたちを育ててきた。十代半ばの長男と次男も学校の合間には畑仕事を手伝い、カタリーナさんが収穫物をサカプラスやキチエの市場で売ること一家の唯一の収入を得ていた。今年二月に植えつけ八月には収穫するはずだったトウモロコシを全て失い、灌漑用ホースや鍬他の農具も失つてしまつたが、借地料は支払わなければならない。表土を流された畑地は、膨大な労力と時間をかけて整えなければ再び畑として利用できない。少なくとも数年間は回復不可能と見られる土地も多く、一帯が被害を受けているので、他の借地を見つけても容易ではない。

容易ではない。

〈写真1〉



次にネグロ川対岸のロサさんの家を訪ねた。ロサさんは以前はコナビグアにも参加し、その後この村で「希望」協会のグループを作り上げたリーダーだったが、去る五月八日に急な病気のため他界されたばかりだった。お母さんと妹さん、近くに住む二人のメンバーから話を聞いた。

〈写真2〉

ロサさんは四人の子どもたちとともにお母さんや妹さんと暮らしていた。お母さんにもグループへの参加を勧め、二人のマイクロクレジット資金を合わせて買

つた家畜を増やし、それを売つて川岸に小さな土地を購入して畑を拡張、野菜や果物のほか新しい花の種を購入して植えるなど、いつも新しいことに挑戦し、重労働も自分でこなしてきた。一家にとつては大黒柱、グループにとつてはエンジンのような存在だったと言える。ロサさんを失つた悲しみに沈む中、次には台風により畑の作物のほとんどを失い、新しく購入した畑は川と化してしまつた。今後はお母さんと妹さんの二人でロサさんの子どもたちを育てていかなければならない。

〈写真3〉



他の二人のメンバーも川岸の畑を失っていた。この少し上流で十軒の家や農民組合の灌漑設備が川に流された隣村には、民間団体から援助物資が届けられていたので、彼女たちも支援を要請しに行ったが、「支援対象はこの村のみ」との理由で取り合われなかったと言う。その一人、イサベルさんが「夫の母親が放置している土地を借りて畑にしようと思う」と話す様子には、自分の力で困難から立ち上がるとうとする意思と自信が感じられた。

#### 〈写真4〉

\*

「希望」協会ではまずこうした被災者の一部に対し、トウモロコシを中心とした小規模な食糧支援を行った。しかし何ヶ月もの間食糧を支援し続けることもできないのは明らかであり、女性たちがその後の生活を立て直せるよう、



鶏や豚など小家畜を飼育するための小規模生産支援を始めることとしている。

#### 【コナビグア（連れあいを奪われた女性たちの会）】

とりわけ多くのメンバーが被災したのがチマルテナンゴ県で、四六五人の女性たちが畑や住居への被害を受けている。〈写真5〉

二〇〇六年に

日本でスピーキングツアーを行ったアナ・ペレスさんの住むサン・ホセ・ポアキル市では、八コミュニティで八十四人のメンバーが畑を失い、内十七人は家も失ってしまった。

\*



ポアキルは中央高地の山間にあり、大きなモタグア川と数本の小さな川を持つ。大規模な土砂崩れが何箇所も起き、小さな川までが氾濫し、主に自給用のトウモロコシ他、野菜やコーヒー、果樹などが流されたり土砂に埋まった。台風が去った後も何度も強い雨が降る度に新たな土砂崩れが起きていたため、ある程度整備すれば再び植えられるような畑でも、危険が高く植え直すことができない。また、土砂崩れによって家

が損失を受けた所は、地盤もゆるく同じ場所には建て直せない場合が多く、家と同時に住居用の土地までも失ったことになる。着の身着のままで避難し、食糧、衣服、農具、台所用具など全てを失った家族もある。一部のコミュニティでは避難所も設けられたが、食糧援助さえほとんど届かないため、大多数の家族は親類の家に身を寄せている。

土砂崩れで道路が何箇所も寸断され、外からの野菜や食料品の供給が途絶えたことで物価が高騰、穀物は二倍近く、野菜や砂糖などは三〜四倍も値上がりし、被災者をさらに困難な状況に追いやっている。

\*

現職市長は、女性の問題解決や市政の透明性などを約束し、コナビグアの女性たちの支持も受けて当選したが、就任後は態度を変えてきていた。「彼も結局ありきたりの政治屋に成り下がった。政府からトタン板や食糧の援助がヘリコプターで届くと、自分の政党の党員や被害と無関係の町の住民に配ってしまった。」とアナさんは嘆いている。

\*

南部海岸地帯では、四コミュニティでコナビグアの女性たちの一八四人が畑を、内四十人は家畜も失い、家が浸水して避難所で生活する女性もある。年間を通して気温も高く平地なので農耕に適した土地と言えるが、豪雨があれば一面浸水してしまう。もともと中央高地から農園労働などの仕事を求めて移住してきた家系が

多く、畑を所有していないので、借地でトウモロコシや野菜を作ってきた。年に二回トウモロコシを収穫でき、大方は一回目の収穫を売って借地料を払い、二回目の収穫を自給用にしている。

アガタ台風により、広い範囲で作物や家畜、住居が被害を受け、さらにその後次々と二つの台風や低気圧に見舞われた。アガタ台風でトウモロコシを失った農民の多くは、天気の後復を待つて再度トウモロコシを植えたが、次の台風でこれも失ってしまった。二度に渡って植えたトウモロコシを完全に失い、新たに種子や肥料などに投入する資金も尽きている。地域一帯が被害を受けているので日雇いの畑仕事の口もない。道路や橋などインフラの損失も大きく、物価も高騰している。また水の問題も深刻である。浸水により上下水設備も機能しなくなり、汚染された水を危険だと知りながら使わざるを得ない。特に子どもたちの間では、高熱や吐き気、下痢などの問題も多く見られている。

\*

地域リーダーであるマリアさんは、「援助は村には届かず、女性たちは手持ちの食糧を何とか長持ちさせようと、一日に食べる量を減らしているような状態。やっと市長が援助物資を持って来たと思ったら、カメラマンに写真を撮らせながら、『来年の選挙でも私に投票するように！』と叫びながら物資を配っていったのよ。」と、怒り、呆れていた。

その他、キチエ県、ソロラ県、ウエウエテナンゴ県などでも、多くの女性たちが畑や家を失

った。通常でも収穫期前の数ヶ月はトウモロコシさえ不足する家庭が多いが、今、生活の糧を得るための畑と今年の収穫を失い、不安や危機感を抱えている。

コナビグアでは被災者の数が比較的小さい地域から食糧支援を始めたが、資金は全く不足している。「食糧が当面の優先で、数週間分しか相当しなくとも、できる支援から始めるしかない。連帯を示すことも重要。中長期的には、家庭菜園から政治参加まで、様々な面から取り組む必要がある。」と、代表のロサリーナさんは話している。〈写真6・7〉

### 【コニック（先住民族農民全国調整合合）】

南部海岸地帯やウエウエテナンゴ、ソロラ、キチエ、チマルテナンゴなどの県で、約五千八百名のメンバーがある九十コミュニティ



イが、作物や畑地、家畜、住居への被害を受けていると言う。またチマルテナンゴ県サン・ホセ・ポアキル市では、十一名が土砂崩れで亡くなっている。

コニックは、ミッチ及びスタン台風後の緊急及び復興支援で精力的に活動した経験を生かし、アガタ台風による被害が見られ始めると素早く動きを始めた。各地域のプロモーターを通して被害の情報を集め、首都事務所と被災地六箇所に支援物資集積所を設置、周囲への協力を要請した。得られた支援と自己資金をあわせ、小規模ながら食糧や飲料水を届け始めた。

自治体や政府機関、市民組織の間で、地域レベルの支援調整に取り組む方針も取っているが、困難が多い。二〇〇五年のスタン台風後、甚大な被害を受けたサンティアゴ・アティトランでは、自治体と住民組織の連携で援助調整の窓口を設置し、コニックもこれに積極的に協力していたが、政府の復興モデル地域に指定される様々な国際機関や大小NGOの協力も入り、誰にも全容が把握できなくなっていた。もうすぐ五年を過ぎようとしている今も、約六十家族が避難所で生活している。

代表のペドロさんは「収穫のない収穫期を迎えることは食糧が尽きることを意味する。これは被災者のみの問題ではない。」と言う。これほどの大規模な被害は個人や市民組織が解決できる問題ではなく、政府の義務であるとして、生産活動や道路・住居等インフラ整備への支援を政府機関に要請する準備を進めている。

## 【被災者への支援】

「支援は政治的利益のために利用されるのみ。」「甚大な被害がなければ被災地として認識されず、目に付きにくい被災者は考慮されない。」「こころした不満はどこでも聞かれ、怒りと同時に「行政に支援を要請してもムダ」という諦めも見える。しかし、行政を監視し、不正があれば告発し、正しく機能するように要求し続けることを放棄するわけには行かない。」

「緊急時にまず助けられるのは貧しくとも連帯意識を持つ周辺の住民」という言葉もよく聞かれた。「自分は無事だったから」「自分も畑を失くしたけれど当面食べる分はあるから」と食糧を提供する、埋まった家の土砂の撤去に協力したり食事を差し入れる、家が損失を受けた家族に部屋を提供するなど、物理的にも精神的にも被災者の支えとなったことは間違いがない。

「私たちのことを心配してくれるのは組織だけ」と、参加している市民組織を通して支援を受ける被災者が言うのも聞いた。組織に入っているかいないかによって緊急支援を受けられるかどうかが決まるのもおかしいはずだが、緊急支援を目的とするのではない市民組織は、メンバーが被災したから支援に動き出しているのであり、被災地全体を支援するようなキャンペーンを持つわけではない。関係性を築いてきた協力団体などに要請して得られる義捐金で、対象が限られているとしても、支援を必要としている被災者の手にこれを届けていることは

確実と言える。

「希望」協会、コナビグア、コニックとも、被災者への支援を続けていく計画であるが、資金は全く不足している。全体に必要な金額は膨大になるが、小額の義捐金でも一人一人の被災者にとつては重要な支援となる。どの組織でも、少しでも多くの方々からの協力をいただけるよう切実に願っている。

### 写真説明

1. カタリーナさん(左)：八月には収穫できるはずだったトウモロコシ畑は跡形もない。
2. ロサさん宅：右から、ロサさんの妹、イサベルさん、ロサさんの母、もう一人のメンバー。
3. 「姉と母の畑も川と化してしまった」と話すロサさんの妹。
4. 自宅の庭に立つイサベルさんと子どもたち：以前は夫の親と同居していたが、「希望」協会のマイクロクレジット活動に参加し始めてから、家を建てて独立した。
5. チマルテナンゴ県サン・マルティン・ヒロテペケ市のコナビグア・メンバー、ラモナさん：三十五年前から少しずつ土地を買い足しながらトウモロコシと野菜を作って子どもたちを育ててきたが、全ての畑が川に流された。
6. チマルテナンゴ県コマラパ市：畑を失った女性たちに分ける食糧を慎重に等分する

7. コナビグアのリーダーたち。  
同：支援の受領サインをする被災者の女性たち。

さる6月12日、レコム総会終了後、参加者全員でハリケーン緊急支援について話し合い、レコムとして2000ドルを「希望」協会に寄付することを決定し、一般会計よりグアテマラに送金しました。また、緊急支援の募金も始めました。寄付はハリケーン被災者の生活立て直しにあてられます。皆様のご協力をお願いいたします。



郵便振替口座名：「グアテマラ基金」

口座番号：00100-6-664427

通信欄に「ハリケーン支援」とご記入ください。

# アングエスの民話シリーズ

今回から新しいシリーズが始まります。ボリビア便りを書いてくれた藤田護さんが紹介してくれた(ソソリサ124号と125号)ボリビア在住の栗原重太さんによるアングエスの民話の翻訳です。

## 【キツネが天の国へ行く】

聖霊のお祭りの日には、鳥たちは天の国へ行くと伝えられています。天の国にはありとあらゆる作物が実ります。娘たちはとてもきれいです。キツネはそんな話を聞いて天の国へ行ってみたくなりました。そこでコンドルにたのみました。

「コンドルさん、天の国へ連れて行って下さいな。」

「よからう、背中に乗りなさい。連れて行ってやろう。」

コンドルは、聖霊の日にキツネを連れて天の国へ行きました。

\*

お祭りが始まりました。みんな踊ったり、飲んだり、食べたりしました。特にキツネは、あらゆるちっそうをお腹一杯食べました。

そのうちに真夜中になりました。

「もう帰る時間だよ。」

コンドルはキツネをつながしました。

「もっ少し、もっ少し。」

と言って、キツネは全く聞きません。

少したってコンドルは再び、

「帰ろうよ。」

と言いました。

「もっ少し、もっ少し。」

キツネはそう言うだけでした。

しばらくしてコンドルは再び

「帰ろうよ。」

とうながしましたが、キツネの返事は同じでした。

そこで、コンドルはキツネを残して下界へ帰ってしまいました。

日の出までに、すべての鳥たちは下界へ帰ってしまいました。

「

\*

羽朝、キツネは

「コンドルがいなくなつた。どうしよう。」

と泣き叫びました。

下界に戻るゝことができません。

「どうしよう、どうしよう、どうやって下界に降りようか。」

と言いながら、あちこちとつろつろしました。

「何かないかなあ。」

と言いながら、いろいろと探しました。

そうしているうちに、丈夫なわらを見つけた。

キツネはそのわらで、下界に届くほどの長い長い縄を編みました。

「

縄の先をぬらして

「下界に届けば土が付くはずだ。」

といながら下ろしました。

土が付いているのを確認すると、その縄を丈夫な木に結び付けて、大喜びで降り始めました。



\*

「もつ下界が近いはずだ。」

その時、インコの群れがギヤア、ギヤアと鳴きながら飛んでいるのに出会いました。

キツネはインコをばかにして

「小便くさいインコたちー！」

と大声で叫びました。

インコの群れは、それを聞くとたちまち引き返して来ました。

「穏やかに話し合ひましょう。縄をつつかないでくださいな。」

キツネはインコの群れに懇願しました。

インコたちは、

「それもそうだな。」

と言って、飛び去りました。

するとキツネは再び叫びました。

「汚らしいインコたちー！」

インコの群れは再び戻って来ました。

「穏やかに、穏やかに。冗談ですよ。そんなに騒がないでくださいな。縄を切らないでくださいよ。」

キツネはインコの群れに縄を切らないように懇願しました。

インコたちは、

「まあそれもそうだなあ。」

と言いながら飛び去りました。

キツネは、やっと下界が見えてくると、再び叫びました。

「鼻の曲がったインコたち、できるものなら縄を切つてみるよ。」

それを聞くとインコたちは、たちまち戻つて来ました。

「鼻の曲がったインコと言つたな。」

と言って、キツネが泣き叫ぶうちに、縄を切つてしまいました。

キツネは、恐怖にふるふるながらやつのこと、叫びました。「人間たち、神様が天から降りてくるぞお、ジュウタンやシヨウルを敷いて迎えなさい、神様が降りてくるぞお……」

「あああ……」  
キツネは石の上に落ちて、お腹がはじけて死んでしまいました。  
人間たちはキツネの叫びを本気にしないで、ジュウタンの代わりに石を敷いたのです。

キツネは腹の中から天の国で食べたトウモロコシ、キヌア、カニヤウアなど、あらゆる食べ物を周囲に撒き散らしました。トウモロコシは、様々な果物などといったしよに溪谷のあたりに撒き散らしました。キヌア、カニヤウアなどの粒の小さな穀物は、アンデスの高地に撒き散らしました。

ですから今日でも、アンデスの溪谷ではトウモロコシや果物が実り、高地ではキヌア、カニヤウアが実るのです。

訳 栗原重太

原本 ライミ2 キツネの話10話 ハイマ1939

編集 フェリックス・ライメ・パイルマニ

語り マリア・スリ (ロアイツア1972)

マルセリノ・ペレス (パタカマヤ1980)

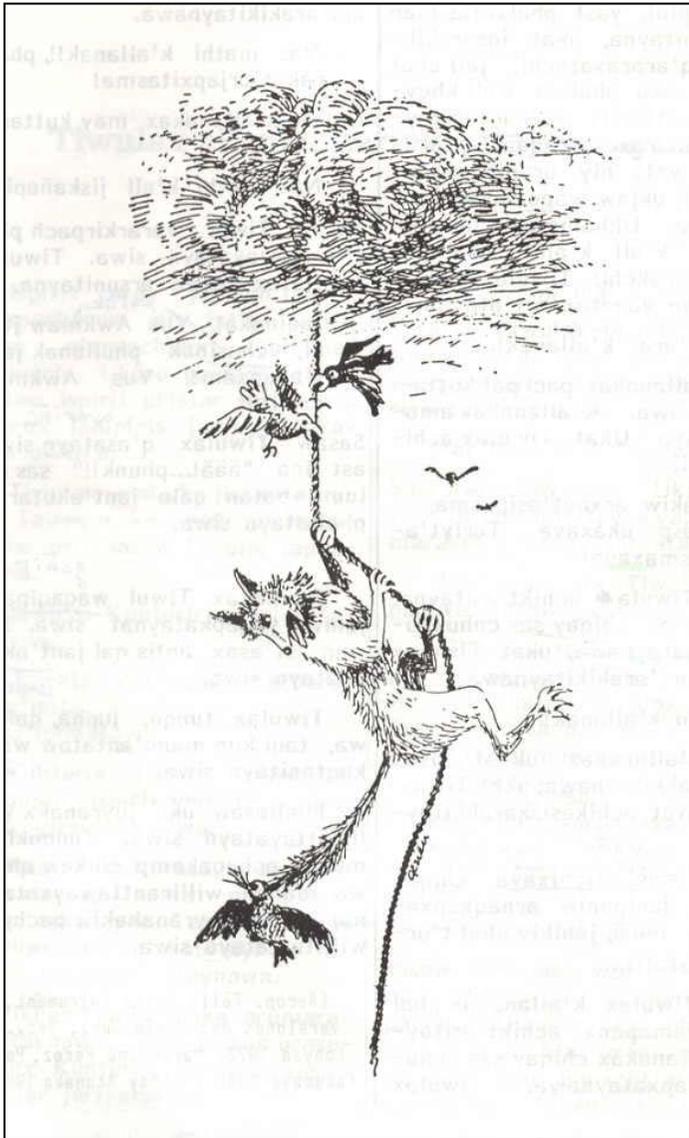
訳者より：

キツネはコンドルとともにアイマラの社会ではもつとも語られることの多い動物です。しかしながら物語の中ではいつも悪者扱いで、最後にはひどい目に会います。

アイマラの人達にとつてキツネは、羊、リヤマ、アルパカなどの家畜を食べる悪者であり、人々はそのずる賢さが大嫌いなようです。キツネと同じように家畜を襲って食べるコンドルが、力と権威

の象徴としてむしろ畏敬の念をもつて見られているのとは大きなちがいです。

原本のライミ2は、アンデス高原地帯のキツネに関する民話を集めた小冊子です。編集者のフェリックス・ライメ・パイルマニ氏は、アイマラ語研究の第一人者で、長くアイマラ語教育に携わり、アイマラ語でさまざまな新聞、民話、小説などを執筆されておられます。さらに、アイマラ語スペイン語の大きな辞書も書かれておられます。



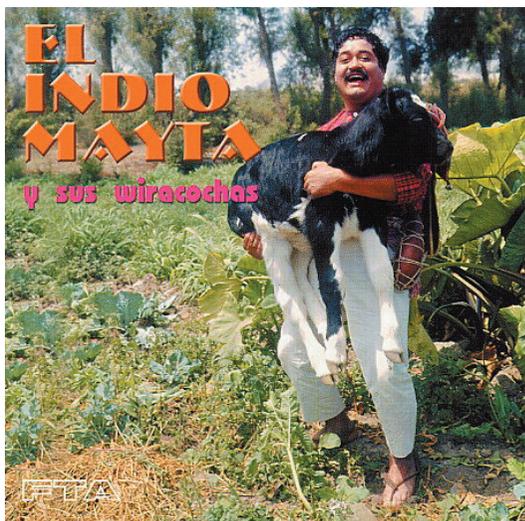
二〇一〇年六月一九日、一時代を築いたペルーの北部アンデスを代表する一人の歌手が亡くなった。七八歳。腎臓病だという。その人の名はミゲル・アンヘル・シルバ、世に「インディオ・マイタ」の名前で知られ、愛された人だ。

彼はペルー北部アンデスに位置するカハマルカ県セレンディンに生まれ、幼少期を北部海岸のペルー第三の都市トゥルヒーヨで過ごした。にもかかわらず、カハマルカの歌が好きで歌い続け、歌手への道を歩むこととなった。

インディオ・マイタの代表曲は、たとえば誰もが声を揃えてあげるのが「マタリーナ」だ。カハマルカのカーニバルの音楽形式で歌われたこの曲は、全国的に大ヒットし、知らぬ人はいないと言ってもいい。ペルー南部地方でワイノの最後に続けて激しく踊られるフーガと呼ばれる部分でも、このマタリーナは歌われる。こんなふうこの曲はに地域を超えて歌い継がれた。カハマルカの平面太鼓カーハを

片手に、陽気に歌う彼の姿は、多くの人々を魅了した。

元来、カハマルカのカーニバル音楽は底抜け



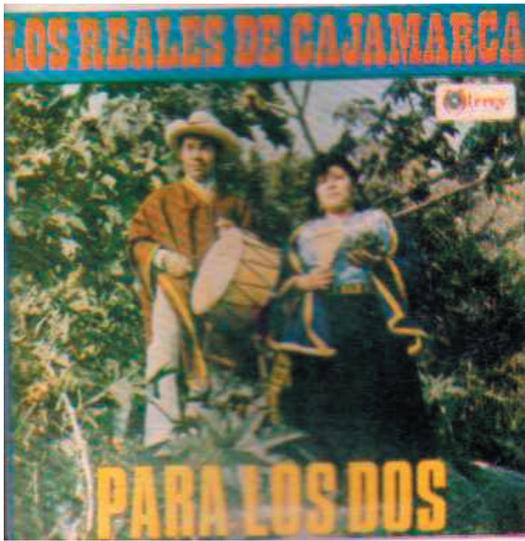
に明るい。ペルーの多くの曲とは違い、曲の終わりをマイナー調で締めくくらない。ひたすらメジャーコードのままどこまでも突き進む、まさに天下無敵の脳天気な音楽だ。多くはワンコードで交互で歌う。そして掛け合いの人が変わる度に別のコードに転調していく。これがテンションが上がる上がる。そうしてどこまでも底抜けに明るい歌を即興で掛け合っていくのがカハマルカのカーニバル音楽の流儀だ。その音楽の魅力ペルー中に伝えたのが、いわば彼の「マタリーナ」だった。この他にも、「カロリーナ」とか「モチエリータ」とかカーニバル音楽以外のヒット曲もあるが、今考えてみるとみんな女の子の事を歌った曲ですね(笑)。まあ、恋心

は万国共通の重要な民衆のエネルギー源ですからね。

カハマルカは、ペルー国内でアンタラという楽器が今なお大衆音楽の中で使用されている数少ない地域の一つだ。アンタラとは、パンフルートの一種で、いわゆるサンポーニャの仲間であるが、二列ではなく、一列タイプのものだ。音階は五音音階で構成されており、基本的にサンポーニャのように音を切って吹くのではなく、つなげて吹くことが多く、まさに風のような優しい音色が魅力の楽器だ。

カハマルカによく見られる楽団の楽器編成は、アンタラ、バイオリン、ギター、カーハというもので、最近ではアコーディオンやサククスなどが入ったりもする。特にバイオリンは他の地域同様カハマルカでも非常に重要な楽器だ。ギターとカーハの生み出す元気のよいリズムに載せてバイオリンとアンタラの絶妙なハーモニーが心地良く奏でられる。ワイノのリズムは南部よりもずいぶん前のめりでフーガ的な激しさがある。それ故、しつとりと歌いあげるというよりは、伸びやかにリズムを波乗りのように紡いでいくような演奏が多いのかも知れない。

こうした楽団の代表格は、なんといってもロス・レアレス・デ・カハマルカだろう。ロサ・アギーレとギジェルモ・アリアスの二人の歌と演奏は素晴らしく、数多くのアルバムを出している超有名グループだ。そしてインディオ・マイ

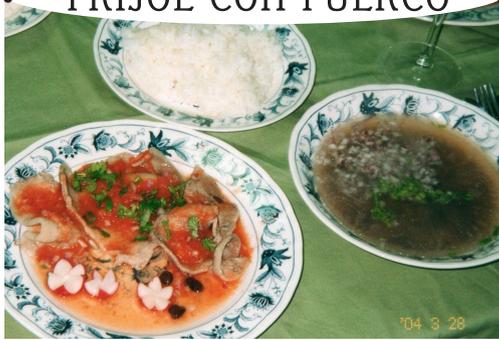


々と彼の楽団ウイラコチャもこの編成だ。その他ロス・トゥコス・デ・カハマルカなども有名だ。また、カハマルカには他にも幾つか個性的な楽器がある。その代表がクラリンド。この楽器は竹製ラップのようなもので、数メートルの長いまっすぐな竹をトランペットのように吹き鳴らす。面白いのは、トランペットなどと違って、吹き口からまっすぐ伸びるのではなく、管の側面にふき口があるので、ラップの先端は真横に伸びていくことになることだ。その先端部分を斜め上 $\Delta$ の度ぐらいいあげるのがかっこいいという美学があるのか、吹き手は少し顔を傾げて吹く。ブブー、ブブーとある意味ペルーのブブゼラである。

その他にも、カハマルカのチョータ地方には、独自のケーナ合奏団がある。複数のケーナ奏者と小太鼓と大太鼓という編成で様々なカハマルカの曲からマリネラまでを演奏する、というスタイルが代表的なようだ。いつどのようこの形式が根付いたのか、気になるところだが、残念ながら私にはまだそのあたりは分かっていない。ともあれ、10人を越えるケーナ奏者が打楽器のリズムに乗せて演奏するというスタイルは、祭囃子と軍楽隊を足して割ったような不思議な感覚を覚えさせる。ロス・ケーナス・デ・クテルボなどが代表的なところか。

ペルー南部のアンデスの奥深さに対して稜線の低いカハマルカ近郊は、酪農が盛んで早くから開けた地方の一つだ。初めて飛行機でカハマルカに行った時、他のアンデス地域の風景とあまりに違う風景に衝撃を受けた。眼下に広がるなだらかな丘と、その随所に散らばる牛たちの姿は忘れられないカハマルカの第一印象だ。そして湯治に来ていたインカ帝国皇帝アタワルパがフランシスコ・ピサロに捕まったのもこのカハマルカだった。牧歌的な土地で花開いたイケケドンドンなアンデス音楽に身を任ずるのも、時にはいいのではないだろうか？

(水口 良樹)



●材料 (4 人分)

- ・黒インゲン豆 (ブラックビーンズ) の缶詰 1 缶
- ・豚のかたまり肉 800 グラム
- ・トマト中 6 個
- ・コリアンダー 4 把
- ・紫タマネギ 1/2
- ・熟したアボガド 1 個
- ・白飯 4 人分
- ・ラディッシュ 8 本
- ・塩、水
- ・レモン 1 個
- ・トウモロコシのトルティーヤ 8 枚

●作り方

- 1) 深い鍋で肉とインゲン豆を、肉がかぶる程度の水でゆでる。最初は強火で、塩を好みに加えて、肉が十分やわらかになったら、鍋から取り出し、4 人分に切り分ける。スープが 4 人分の量になるように適宜水を加える。
- 2) トマトを洗い、アルミ箔でくるんで、オーブンかグリルで焦げないように気をつけて焼く。よく焼けたら皮を除き、ソース状になるまで包丁を入れる。コリアンダーを洗って細かく刻み、トマトソースに加える。紫タマネギもみじん切りにして半分をトマトソースに入れる。最後に塩をふってまぜる。
- 3) 残りのみじん切りにしたタマネギを、ガラスの小さな容器に入れ、後に豆のスープに加える。
- 4) レモンを洗って 4 等分する。
- 5) アボガドの皮をむき、4 等分する。
- 6) ラディッシュを洗って適当な大きさに切る。花形にくりぬき、冷水のなかに入れておけば、花が開くようになる。(料理をはじめ 1、2 時間前にそうするとよい)

●盛りつけ

- 1) 平皿に肉を置き、トマトソースとラディッシュを飾る
- 2) 豆のスープは深皿に。
- 3) 別の平皿にご飯を盛る。
- 4) トルティーヤをあたためて皿に重ねる。
- 5) 小皿にアボガドと小さく切ったハバネロ (ハバネロがなければ瓶詰めのチリソースでも可)、レモンを飾る。
- 6) トマトソースにレモンを絞り、豆のスープにタマネギのみじん切りを加える。  
のどが渴いたら冷たいビールといっしょにどうぞ。

インゲン豆と豚肉の煮込み

今回は、「ユカタン人は毎週月曜日ごとに豆と豚肉の煮込みを食べる」と言われるほどユカタン半島で定番の「インゲン豆(フリホール)と豚肉の煮込み」を紹介したい。メキシコの他の地域と同様、ユカタンでもインゲン豆をよく食べるが、日本のように砂糖では味付けしない。

インゲン豆は、繊維やタンパク質、ビタミン B、ナイアシン、ビタミン B2、葉酸、ビタミン B1、鉄分、亜鉛、マグネシウム、カリウムを含み「完全食品」とも呼ばれる。また、血中コレステロールが増えるのを防ぎ、2 種類の水溶性繊維と不溶性の繊維を含むため、便秘や結腸癌のような消化器系の病気も防ぐ。繊維は、炭水化物の吸収を遅らせて、血中のブドウ糖をコントロールする効果もあるから糖尿病の治療にも役立つ。

私は、日本に来てはじめて小豆などの豆を食べたとき、それが甘いことに本当に驚いた。スーパーマーケットで売っているパック詰めめの豆がすべて砂糖で味付けされていることにも衝撃を受けた。

もちろん、日本風の豆料理も大好きだが、メキシコ風の味付けもとてもおいしい。

きょう紹介するユカタン料理は、材料のうち epazote (アリタソウ) だけは日本での入手が難しい。ハーブの一種で独特の香りと味をユカタン料理に与えるものだが、アリタソウ抜きでもかまわない。もし入手できたら、よく洗って肉と豆のなかに加えて一緒に煮込めばよい。インターネットによると、東京のいくつかのメキシコ料理の食材を扱う店で、アリタソウを売っている。

私が子供の頃は、毎週月曜日はこの料理を食べるのが楽しみだった。メキシコに住んでいたころは、生のハバネロ唐辛子を丸ごといっしょに食べていた。だが、長年日本に住んで味覚と胃が変化して、今ではそんな食べ方はできなくなった。

生のハバネロが見つからなければ、瓶詰めを買えばよい。ハバネロはきわめてユカタン的な材料であり、料理に独特の味を添える。だがピリピリするほど使う必要はなく、風味が感じられる程度でよい。インゲン豆 (フリホール) は、成城石井や阪神のような、外国の食材を売る店で購入できる。最後に、頭が痛くなるほど冷えたビールと一緒に食べることを強くおすすめしておきます。

## メキシコ —— ナルコ・ミリタル(麻薬マフィアの兵士)に対して重罰

メキシコ下院は今年4月28日、犯罪組織や麻薬カルテルに入るために脱走した軍兵士に最高60年の刑を科するという法改正を可決した。麻薬カルテルとの闘いにおいて重要な任務を与えられている軍隊の汚職を食い止めるためである。最も凶暴な麻薬カルテルにエリート訓練を受けた兵士たちがいることはすでに知られている。シナロア・カルテルの中の殺し屋グループ、ロス・セタスは90年代終わりに軍隊の特殊部隊の兵士31人から67人が脱走してできたものだ。

ここ数年で10万人の兵士が脱走していることが防衛省のデータで明らかにされている。そのうちどれくらいが麻薬カルテルに入っているかはわからないが、ロス・セタスは2009年に、米国国境に派遣されている軍兵士を高給でリクルートしていた。

法改正により脱走を食い止め、軍への忠誠強化を目指すものであり、犯罪組織に加わった兵士は30年から60年の刑が適用され、軍から追放される。また、兵士が組織犯罪や麻薬密輸に加担した場合には15年から60年の刑が科せられる。

また、この法改正が可決された前日には改正が可決されたが、こちらは麻薬密輸撲滅戦争における軍の役割を制限するものだ。一般市民が多く殺害されていることと軍による人権侵害が告発されているからだ。カルデロン大統領が政権を取った2006年の12月以来麻薬密輸関連で殺された人びとは2万2千700人にのぼる。(2010/04/28 BBC-Mundo より)

## ラテンアメリカ —— 汚れた水は戦争以上に人を殺している

世界水の日である3月22日、国連は加速する都市化、工業化、不適切な衛生サービスが世界中の人が飲料水にアクセスすることを阻んでいると警告した。

国連環境計画(UNEP)の報告書「病気の水」によると、汚染された水による死者は戦争による死者を上回り、その数は毎年増加している。同報告書は毎日20億トンもの排水が世界中の水路に流れ込み、病気を引き起こしたり生態系に深刻な影響を与えているとしている。

ラテンアメリカは天然資源が豊富で、鉱山、石油や天然ガス、アグロビジネスが盛んだが、そのために多量の水を消費している他、有害な工業廃水を垂れ流しているケースも多い。農民、先住民族共同体は生活を維持するためのきれいな水を確保するために巨大な多国籍企業や自国の政府と闘わなければならない。UNEPは企業が廃水を利用可能なレベルにまで浄化するコストを担う企業責任があると指摘する。水をめぐる戦いは、アマゾンのエクアドルの油田開発や、ウルグアイの製紙工場、中米の大規模ダム開発などで頻発している。アンデス先住民族組織調整機関(CAOI)は、「水の商品化」は、国家が押し付けている資源を略奪する新自由主義政策の一環だと指摘し、大規模な工業開発は事前に先住民族と協議することを各国に要求している。(2010/03/24 noticiasaliadas.org より)

## ボリビア —— 奴隷状態に置かれているグアラニー先住民族

ボリビア南部の農業地域でグアラニー先住民の約600家族が強制労働や奴隷状態に置かれていることを米州人権裁判所(CIDH)が最新の報告書で明らかにした。ボリビア政府はこうした状況に対処し、グアラニー先住民族のテリトリー再建のために努力してはいるが、事態はいまだによくならない。共同体のメンバーが身に覚えのない「借金」のために労働をさせられるなど、その多くは賃金が支払われていない。

ボリビアには約8万人のグアラニー民族が住み、2001年のデータでは彼らが居住するチャコの南部地域の貧困率は75%以上で、貧富の差が極度に著しい。極貧状態におかれている先住民族は、「残忍な見せしめ」として農作物が焼かれたり、家畜が殺されたりしたために一層貧しくなったということだ。また国際法やボリビア憲法で全面的に禁止されている児童労働も行われているとCIDHは明らかにしている。チャコ地域には行政の存在がなく、警察も機能していないことが事態をさらに悪化させている、と報告書は指摘する。そしてボリビア国家がグアラニー民族の尊厳ある生活の権利を保障し、彼らの土地の集団的権利を守る対応策をとるように勧告している。

(2010/04/22 noticiasaliadas.org より)

## エルサルバドル—— カナダ鉱山会社が政府に対して賠償請求

カナダの鉱山会社パシフィック・リム・マイニング社はエルサルバドルの政府に対して補償を要求する裁判を起こした。エルサルバドル当局は環境危機を告発し、鉱山開発の許可を与えることを拒否している。パシフィック・リム社はエルサルバドルの北部、カバニャス県にエル・ドラド鉱山を保有し、前の右派政権時代に開発が許可された。現フネス政権は金を採掘するために用いられるシアンによる潜在的な環境汚染や水源が汚染される危険を指摘し、操業許可を撤回した。開発計画地域はエルサルバドルの中で最も貧しい地域の1つであり、同社は数百人の雇用を創出することを確約した。けれども政府と地元組織はこの開発が環境に深刻な被害を与えるだろうことを示唆、鉱山開発に反対する2人の活動家が殺害されている。

同社は、エルサルバドル政府に投資していた7千200万ドルの費用の返還を要求しており、さらに世銀の投資国際調整センター(CIADI)にこの事案を持ち込み、エルサルバドル政府は投資を危機に陥らせ、北米と中米・ドミニカ共和国の自由貿易協定((DR-CAFTA)違反だと訴えている。

エルサルバドル政府は同社の訴えを拒否し、天然資源環境省は環境に被害を与えるいかなる開発計画も認めないとし、同社が被ったと主張する被害の責任はエルサルバドル政府にあるのではなく環境対策を行わず利権だけを行って開発を進める企業側にあると主張している。(Noticias Aliadas2010/06/09 より)

## ブラジル—— 豪雨続き、40人以上の死者と数千人の行方不明者

ブラジル北東部で6月17日から豪雨が続き洪水や地滑りなどによって40人以上の死者と数千人の行方不明者が出ている。被害が最も深刻なのはアラゴアス州とペルナンブコ州である。アラゴアス州では21日の午後までに26人が死亡し行方不明者は1000人を超え、死者の数はさらに増える可能性があるという。同州では22の都市で4万軒以上の民家が流された。断続的に続く激しい雨により川が増水し、橋や道路、鉄道が流され1500km以上の道路が寸断するなど、人道支援が届くのが困難になっている。

警察発表によればブラジル人10万人以上が避難生活を余儀なくされている。ルラ大統領は被災地の知事らと会合するとともに、22日には緊急閣議を招集し、各州に1万4千ドルを緊急支援すると伝えた。支援総額は5万6千ドルになる見込み。最も緊急に必要なものは飲料水、食糧、衣類であり、救助隊は被災地域の人々をヘリコプターを使って救出し、軍隊や海軍も救助活動にあっている。ブラジル当局は2万人分の食糧と1万2千枚の毛布などの配布を命じている。(BBC.MUNDO 2010/06/21 より)

## コロンビア大統領選挙 —— 前政権を継承するサントスが勝利

6月20日行われた大統領選挙の決選投票(第1回投票は5月30日)で、与党の全国統一社会党(U党)党首で前国防相ファン・マヌエル・サントス候補が緑の党共同党首で、元ボゴタ市長のアンタナス・モクスを大差で破り大統領に当選した。サントスの得票率は69%、900万票以上を獲得した。モクスは得票率27%だった。サントスは現アルバロ・ウリベの政権で貿易相、大蔵省、そして防衛相と三つの閣僚経験を持つ。ウリベの後継者としてその政策を引きついでいくことになる。腐敗のない政府、政治の透明性を訴えたモクスは、第一回投票より50万票多く得票したが、サントスにははるかに及ばなかった。

サントスは、輸出増大、失業率の引き下げ、雇用の創設と住居建設を公約に掲げ、700万人を貧困から救い出すと言っているが、極めて非現実的という批判もある。正義とジェンダー平等も掲げているが、選挙キャンペーンや当選のスピーチでは女性、先住民族、アフリカ系コロンビア人についてはほとんど触れなかった。ウリベ政権で批判された汚職や人権侵害、準軍事組織との関係などをどこまで改善できるかが課題。

与党U党は、今回の総選挙で議会の約80%を押さえた。(Noticias Aliadas 25/06/2010 より)

[お詫び] 前125号で124号と同じニュースクリップが手違いにより掲載されたことをお詫びいたします。

# 2009年度 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク 会員総会議事録

日時：2010年6月14日(土) 場所：山崎さん宅(東京)・レコム梅村図書館(京都)

会員数135名(正43名、学生7名、賛助9名、購読76名)のうち、総会出席者10名、はがきやメールによる委任状は15名。

## 議題1 2009年4月～2010年3月 活動報告

- 1 海外支援活動。コナビグアの地域プロモーター支援(1人分・472,957円)／2009年9月に現地視察。武田由紀子ほか4名で実施。／2010年3月にグアテマラで民衆法廷。997,500円を寄付。日本から5名参加。国内では武田さん、安藤さん地域FMラジオに出演。
- 2 国内活動を報告。「そんりさ」発行(119号から124号)／総会を大阪・京都で開催
- 3 「グアテマラ支援検討委員会」設置。現地視察報告会を東京・京都で行い、拡大運営委員会で議論した。
- 4 南米連続講演会を6回開催
- 5 イベント参加 東京は2009年10月にグローバルフェスタ 大阪は2010年2月にワンワールドフェスティバル(質問)イベントではどんなことをしているのか? やりがいは? →東京ではレコムの活動紹介、民芸品、カレンダー、そんりさ、書籍販売。一般の人々との出会いの場。大阪は初参加だったが、ラテンアメリカのNGOが他には日系関係のものしかなく、情報をほしが来る来客は多かったものの、民芸品も活動紹介の資料もない状態となってしまった。反省を次回に生かしたい。
- 6 フォトコンテスト開催 8点の応募があり、4作品を選出。
- 7 アルテ・マヤ・カレンダーの販売 250部仕入。大西さんが発送作業を担当。無事に完売(388,500円)
- 8 翻訳ワークショップ ラテンアメリカの様々なテーマを翻訳、そんりさに掲載。
- 9 民芸品販売 上記のイベント以外で松井やより賞受賞ツアーでも販売(421,380円)
- 10 やより賞受賞記念ツアーの開催(京都・神戸・札幌・横浜・東京の7講演)
- 11 その他

(質問)スタディーツアーみたいなことは開催しているのか? →あくまで会員内での訪問にとどめている。2002年以降、旅行法が厳しくなり、ツアーは企画しづらくなっている。会員が訪問する際に合わせて募集し、本人の責任の上で参加とする。

(質問)民芸品の買い付けについてどうなっているのか? →現地在住の石川智子さんが基本的には担当。買い付けは石川さんが帰国する4月と、イベント前の秋が多い。2010年は9月の武田さん訪問時を予定。

## 議題2 2009年度 会計報告

(質問)収入の収益事業売上(書籍・資料)とは? →おそらく「そんりさ」の売上

(質問)民衆法廷支援の寄付金がわかりにくい →グアテマラ基金と収入の寄付金にも入っていること、また2010年4月に石川智子さんが帰国した際にも渡していたりして、年度がまたがって計上されている。

・会計報告下のやより賞ツアーの収支は、会計報告からこのツアーの分だけを抜粋し、ツアー単体では黒字であったことを確認する表として作成。残額の109,422円は民衆法廷カンパとして渡している。

## 議題3 2010年4月～2011年3月 活動方針

- 1 海外支援活動方針 グアテマラ支援 女性プロジェクト「希望をはぐくむ女性たち」支援。送金額はグアテマラ基金で集まった金額を予定しているが、先方と相談しながら、決定する。 ・「民衆法廷」の報告とフォローアップ
- 2 国内活動方針を報告 「そんりさ」発行年6回 ・グアテマラに関する情報収集 2010年9月に再度武田さんを派遣し「希望」プロジェクトを視察、および他の活動の視察を行う。その時に参加者も募集して、デレゲーションにする。
- 3 新パンフレットの作成 古谷さんを中心に2010年6月完成。(2000部)
- 4 イベント参加(10月 グローバルフェスタ・2月 ワンワールドフェスティバル)
- 5 民芸品販売 マニュアルや商品につけるカードを工夫し、先住民族文化の回復やフェアトレードを打ち出し拡販につとめる。
- 6 アルテ・マヤ・カレンダーの販売 仕入数などについては運営委員会で検討。
- 7 翻訳ワークショップの継続
- 8 ホームページとメーリングリストを通じての情報発信 ホームページは夏以降リニューアルを予定。
- 9 スピーキングツアー 2011年度には「希望」プロジェクト代表を招いてスピーキングツアーをできるよう準備する。関連団体に情報発信し、横のつながりを持つ。資料準備や会場決定なども行いたい。
- 10 ボリビアへの「人々と出会う旅」実施の可能性の検討
- 11 コロンビア関連の活動への協力

## 議題4 2009年度 予算

・収入のグアテマラ基金「カレンダー販売」の項目では200部を販売した場合の金額(400,000円)となっている。

(質問)支出のグアテマラ基金の送金分が500,000円となっているが、「希望」プロジェクト側は知っているのか?

→先方には伝えている。これから具体的な用途と金額を話していく予定。

## 議題5 役員選出

2010年度運営委員：古谷桂信さん、片岡(栗田)桂子さん、新川志保子さん、杉本唯史さん、斉藤忍さん、太田裕之さん、大西裕子さん(事務局長)。監査委員は山本和彦さん、山崎えりさん。以上 (まとめ 嘉村早希子)

# \*\* Información \*\*

## お知らせ

### ◆日墨友好 400 年記念「古代メキシコ・オルメカ文明展－マヤへの道」◆

日時:2010年7月31日(土)～9月26日(日) 月休(祝日は開館、翌日休館)

10時～18時 \*毎週金曜日は19:30まで夜間開館、入室はそれぞれ30分前まで

場所:京都府京都文化博物館(住所:京都市中京区三条高倉 Tel:075-222-0888)

入場料:大人1300円、大高生800円、中小生500円(当日券)

### ◆ラテンアメリカの人々と映像 ～私のであったコロンビアの先住民族～他◆

エクアドルのコロンビア難民とコロンビア先住民族のコミュニティーの暮らしの様子をスライドを交えて報告。シネミングアサパティスタのグループが撮った映像を通し、これらの取り組みについて紹介する。

日時:10月3日(日)14:00～ 会場:未定(京都市内)

お話:柴田大輔(フォトジャーナリスト)

資料代:700円

主催:メキシコ先住民運動連帯関西グループ(DQM06014@nifty.com)

共催:レコム

詳細は関西グループHP(<http://homepage2.nifty.com/Zapatista-Kansai/>)、もしくはレコム事務局までお問い合わせください。

お知らせコーナーについてですが、そんりさは隔月発行となっております、切は奇数月の10日となっております。情報掲載ご希望の方はお早めをお願いします。リアルタイムでブログにて情報発信も行っていますので、こちらもご利用ください。

【ブログはレコムのHP <<http://www.jca.apc.org/recom/>> よりどうぞ】

## レコム梅村図書館について

貸出を開始しております。寄贈等により、新刊も入ってきています。目録がお手元にならない方は事務局までお知らせください。ホームページにも目録を掲載しています。

## 会費について

会費期限は「そんりさ」をお届けする際の封筒宛名ラベルに印字しております。期限が来ましたら、事務局よりお知らせを同封しますので、お早めの更新をお願いいたします。

## 事務局短信

★そんりさの発送作業は主に京都にて。毎回、楽しい会になっています。終了後には一緒に食ったり、飲んだり。ぜひぜひお近くの方はお気軽にご参加ください！

★レコムではご自宅近くのイベントなどで民芸品を売ってくださる方を募集中！売上はグアテマラ基金に寄付されます。出店料・送料などの実費はレコムが負担します。

★電話は常時留守番電話となりました。伝言を残しておいて頂ければ、こちらより折り返しご連絡いたしますので、よろしくをお願いいたします。

\*\*\*\*\*

次回『そんりさ』の印刷・発送作業は 月 日(土)です。参加いただける方は連絡ください。  
大変な作業も、みんなでやれば楽しくあつという間にできてしまいます。

レコム・メーリングリスト参加のご案内:会員、購読者は無料で参加できます。登録したい方は  
E-mail : recom@jca.apc.org までアドレスを連絡下さい。

ホームページのご案内 レコムのホームページがどどんりリニューアル!  
<http://www.jca.apc.org/recom/>

『そんりさ』バックナンバーの紹介

Vol.125	ボリビア気候変動世界会議	Vol.121	ペルー先住民族の最近の動向
Vol.124	ハイチ特集	Vol.120	コロンビア 慢性化した紛争
Vol.123	やより賞記念ツアー報告	Vol.119	ナルコメヒコ メキシコの麻薬
Vol.122	グアテマラ視察報告	Vol.118	エクアドル資源開発と先住民族

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。  
入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。  
レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

- ☆郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク
- ☆会員 年 8,000円 (学生 5,000円) …会の運営、総会での投票、『そんりさ』資料閲覧・貸出
- ☆賛助会員 年 10,000円 (一口) …資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加
- ☆『そんりさ』購読者 年 4,000円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒616-0004

京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556 (留守電)

☺お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは  
は留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

61万 2102円

<グアテマラ基金>

47万 6508円

(2010年7月22日現在)